

課程博士学位請求論文
審査報告書ならびに審査結果

学位審査委員会：

主査 虹林 慶

副査 村尾 治彦

副査 レイヴィン リチャード

副査 小谷 耕二（九州大学名誉教授）

課程博士学位請求論文：Battlefield as Purgatorial for the American Self: Tim O'Brien's Vindication of the Vietnam War Experience in *If I Die in a Combat Zone*, *Going After Cacciato* and *The Things They Carried*

審査対象学生：英語英米文学専攻 156600 三牧 史奈

公開審査日：令和2年8月4日

（論文要旨）

本研究は、これまでになかった視点や枠組みにより、Tim O'Brien（ティム・オブライエン）（1946-）の代表的ベトナム戦争小説を3部作として扱い、それがアメリカ文学のキャンノンとなりうる資質を持つことを示した、斬新な内容となっている。先行研究の多くがオブライエンのベトナム戦争小説のそれぞれを個別に扱っているのに対して、本研究は、*If I Die in a Combat Zone*（『僕が戦場で死んだら』）、*Going After Cacciato*（『カチアートを追跡して』）、*The Things They Carried*（『本当の戦争の話をしよう』）を一つの大きな流れとしてとらえ、それをトラウマ（特に「闘争＝逃走」反応から生じた従軍にまつわる）の煉獄的浄化のプロセスとして解釈する。この解釈を行うにあたり、テキスト分析に加え、当時の冷戦期アメリカの社会や文化の考察や学際的な援用を行うことで、独自のオブライエンのベトナム戦争小説評価に成功している。青年期の葛藤や不安、アメリカ人の自己、罪の意識、などの普遍的なテーマについての分析を織り交ぜることで、オブライエンの文学的価値について再認識させ、そのアメリカ文学史における重要性を訴える内容となっている。

本論文は序論に続く3つの章と結論、という構成となっている。序論で全般的な説明を行い、それぞれの章が、『僕が戦場で死んだら』、『カチアートを追跡して』、『本当の戦争の話をしよう』を扱い、結論で全体のまとめが示される。以下、章ごとの詳細を示す。

第1章では、『僕が戦場で死んだら』を扱う。先行研究において過小評価される傾向にある本作品だが、本研究は、ベトナム戦争従軍を巡る「闘争＝逃走」の葛藤を扱った作品であり、後の2作品にもつながる重要なものとして提示する。エピグラフに示されるように、本作品は自由意志の問題を扱っている。だが、この自由意志とは個人主義的なものに止まらず、

当時のアメリカ社会の同調圧力に深く関わるものであり、両者のジレンマの象徴が従軍問題として表現されていると、本章は分析する。古典の教養を身につけ、民主党の大会にも出席するインテリである主人公は、最終的に従軍を個人的には非と判断するが、主人公が享受する当時の大衆文化や第2次世界大戦後のアメリカの勝利主義は従軍を是と擁護する。筆者は、オブライエンの描くベトナム戦争に社会問題や自己確立の問題が潜んでいることを指摘し、その根底にアメリカの理想的自己、父権との葛藤、ヒロイズムや勇敢さの問題があることを抉り出す。主人公にとって、戦場が社会的問題と個人的倫理的問題がせめぎあう空間であることを示しつつ、筆者は、アリストテレスの中庸の徳などの哲学的議論の重要性を前景化してみせる。それによって、本作品が理想的自己を巡る求道のプロセスを扱ったものであることを明らかにしつつ、いかに後の2作品の根本的テーマを本作品が胚胎しているかを示す。

第2章は『カチアートを追跡して』を分析する。先行研究は本作品をバーリンの過去、バーリンの従軍の様子、バーリンが空想するパリへのカチアートの追跡、の3つの語り的手法に着目したものが多く、これに対して本章は、その語りの重要性は認めつつ、前章から続く「闘争＝逃走」反応を空想の旅のナラティブにおいて読み解くことを試みている。まず、バーリンを始めとした従軍兵がいずれも青年期であることやバーリンが人生の目標を定められないことなどを考慮に入れて、エリクソンを援用しつつ、空想の旅を青年期のモラトリアムとして解釈する。例えば、旅の途中でバーリンが目撃する軍務放棄者の末路や恋人サーキンとの煮え切らない関係は、前者は軍務への不満と不安、後者は性的未熟という形で、青年期の心理が示されたものとして説明される。筆者は、バーリンが第2次世界大戦後の経済的繁栄がもたらした大衆文化の申し子であり、大衆と同じ価値観を持つことに安堵するマインドセットを持っていることを指摘する。さらにリースマンを援用しながら、「他者志向型」のバーリンは結局のところ、社会の同調圧力に応じたと結論する。加えて、バーリンが従軍した兵士達だけではなく、同時代の多くの青年の心理を代表していると論じる。まとめとして、筆者は、冷戦期のイデオロギーに翻弄された人々が、冷静な判断もできないまま、困惑しつつもベトナム戦争を体験あるいは傍観した事実を、作家オブライエンが本作品で批判的に表現していると結論する。

『本当の戦争の話をして』がベトナム戦争体験についてのオブライエンの一つの結論を示している、というのが筆者の考えであり、第3章はこれまでの議論を踏まえつつも、それをさらに発展させたものとなっている。「闘争＝逃走」反応に端を発するベトナム従軍兵士の苦悩は、実際の戦闘体験を経てさらに強まり、最終的にはトラウマとして残留することになる。この記憶に残留したトラウマに寄り添い、その真実を描き出そうとするのが本作品であると筆者は論じる。まず筆者は「物語における真実」というオブライエンの考えに着目して、トラウマが事実の列挙によって語りえるものかどうかを検証する。本作品は従軍兵士についての数多くのエピソードを集めたものであり、それらの多くは従軍兵自身による、真偽が定かでない報告から成り立っている。しかし、いずれも真の体験として語られるこれらの

エピソードは、戦争体験の真実が必ずしも戦場での事実そのものだけではなく、その体験がもたらす内面の特異性にあることを示している。この「物語における真実」に拠った本作品を筆者は高く評価し、ポストモダン的な相対主義的特質を持ちつつも、戦争文学をより大きなコンテクストで読むことを可能にする秀作とする。筆者は特にオブライエンの記憶についての考えを取り上げ、プルーストなどを引きながら、罪の意識やトラウマを浄化しうる物語の原動力として分析する。例え記憶が否定的なものであったとしても、物語がそれに対して芸術的な力による昇華を行うことで、悩める魂は浄化へと煉獄の階段を進んでいくことができるのである。過去の体験は物語によって何度も「現在」となって甦る。ちょうど記憶が死者を救い上げるように（生者にとっての慰めとして）、記憶はトラウマを慰め上げるのである。このように、筆者は「闘争＝逃走」反応から始まった、主人公たちの道徳的問題が『本当の戦争の話をしよう』において一つの帰着点に至っていると論じている。

（評価）

本研究は次の3つの点において画期的なものと判断する。まず、先行研究が問題の核心として十分には捉えていなかった、従軍についての逡巡を、その後の戦争体験のトラウマにも繋がる最大の問題として看破した点である。特にこの問題を心理学あるいは社会学的（エリクソンやリースマンなどを含む）側面から検証し、「闘争＝逃走」反応の枠組みを使って説明したところに、手法面における独自性を認めることができる。次に、この逡巡が単なる主人公の個人的な問題ではなく、1960年代に青年期を迎えた人々にとって共通の、社会的な問題（すなわちアメリカの勝利主義のイデオロギーに翻弄される民衆という意味で）であることを指摘している点である。このことによって、オブライエン作品がアメリカの社会文化の変遷を鋭くとらえるものであることを明らかにしている。最後に、この問題がある時代の個人と社会に止まるものではなく、アメリカ文学の黎明期から問題となっている、自己の確立という、普遍的な問題に深く関わるものであることを指摘している点である。このように、オブライエン作品がキャノンとしての地位を将来的に獲得するに値することを示す根拠の一つが、本研究によって示唆されたと言えるであろう。

別の見方をすれば、本研究はベトナム戦争3部作を軸とする視座を設定することで、すでにアメリカ国内外で多くの賞を授与されている、オブライエン作品の評価理由を明快にしたとも言えるであろう。この目的のために、本研究が様々な面（哲学、自伝、発達心理学、社会学など）からテキストにアプローチしている点は特筆すべきである。先行研究が等閑視していた要素を注意深く選び出し、それを効果的に使って、オブライエン作品の世界の拡がりの豊かさとテキストの複雑さを、説得力を持って論じている。作品の文学的意義が分かり易く示されており、研究者のみならず一般の読者も、本研究の恩恵を浴することは想像に難くない。以下、各章ごとに本研究の成果を詳述する。

第1章は『僕が戦場で死んだら』を本研究の焦点ともいえるべき、ベトナム戦争従軍を巡る主人公の「闘争＝逃走」反応に着目して読み解いている。この反応が実は個人的なものだけ

ではなく、社会的なものであることを示している点が独創的な点である。さらにそれが主人公の哲学的テキストを通じた自己分析と絡んでいることを示し、ヨーロッパの精神史やアメリカの精神的土壌を炙り出している点も興味深い点となっている。主人公による従軍を巡る自問自答と自己分析は、リベラリズムと同調主義という対立的思想がそれぞれ定義する勇敢さについての逡巡と説明され、本作品がイデオロギーの支配力についての批判的考察となっていることを明らかにしている。このイデオロギーを、主人公の出身地であるアメリカ中西部のコミュニティの地域性、第2次世界大戦以降のアメリカの勝利主義、メディアを介した大衆文化の影響力、などを射程に入れつつ論じている点で、十分なコンテクストの中でテキスト分析ができていると評価できる。従来のベトナム戦争文学がどちらかといえば特殊な個人の体験の記録として語られていたのに対し、本作品が前述の社会的問題を孕んだ、自己確立の問題に取り組んでいる点についても、本研究はつまびらかにする。すなわち、社会的同調圧力や勝利主義、大衆文化の作り上げる理想的自己のイメージ、などが従軍兵に、ヒロイズムを基調とした複雑な自己確立の問題を突き付けていると読み解いている。さらに、その複雑が、第2次世界大戦で活躍した主人公の父との対峙（父権の問題）、伝統的なアメリカの理想的自己（フロンティア精神やエマソンの定義を含む）との葛藤、などを含んでいるとして、本作品がアメリカ的自己の危機という大きなテーマに直結していることを暴いて見せる。

『カチアートを追跡して』を扱う第2章は、オブライエンにおけるポストモダン的な要素を確認しつつ、第1章のテーマをさらに探求している。先行研究が、主人公バーリンが語る自身の過去、現在、カチアートの逃避行の空想、の3つのナラティブを中心に読み解くのに対して、本研究は前述の「闘争＝逃走」反応を軸に作品を読み解く。本章は特に当時のアメリカ社会を反映するエリクソンの発達心理学とリースマンの社会学を援用することで、これまでにないバーリンの空想についての解釈を可能としている。筆者は、バーリンを含めたベトナムに従軍した兵士のほとんどが青年期にあったことを確認した上で、パリへの空想の旅をエリクソンの言うモラトリアム心理の表れ（つまり決断の先送り）として解釈する。旅の道中で目にする軍務放棄者たちの姿が与える不安や、恋人サーキンが提案するパリでの同棲生活への期待なども、利己主義と利他主義のはざままで苦悩するバーリンのアイデンティティ確立を巡る心理として分析してみせる。また、最終的に空想の旅をあきらめ、現実の戦場に戻るバーリンの決断は、自身が帰属する社会からの承認欲求の充足による、自己確立の行為として説明される。この点について、筆者はそれが、エリクソンの言う他者からの目を気にする青年心理を基調としていることを示した上で、そのようなマインドセットが画一的な価値観を要求する冷戦期イデオロギーの産物であることを指摘してみせる。さらに、バーリンが青年期を迎えたであろう1950年代の白人中流社会が共有していた大衆文化がいかに社会的同調を生み出す力となったかを、筆者はリースマンの『孤独な群衆』も援用しながら議論してみせる。バーリンはリースマンの言う「他者志向型」に分類される青年であり、一方では自分の父親を含めた家族や共同社会への愛着を示し、他方ではそれらからの

罰を恐れているのだ。このように、バーリンの抱える個人的問題が、多くの青年が抱える一般的な問題（従軍者であるかどうかは無関係に）であることを示した上で、筆者は本作品が単なる戦争についての物語ではなく、多くのアメリカ人が抱える普遍的問題を比喩的に扱うものであることを鮮やかに分析してみせる。

第3章は『本当の戦争の話しよう』をオブライエンのベトナム戦争作品の帰着点として位置付ける内容である。ベトナム戦争の20年後に書かれた本作品は、懐古的に戦争体験を振り返る形をとっている。したがって、前の2作品が主人公の個人的葛藤を描く一方で、本作品は従軍した兵士達への共感に満ちた描写となっている。この点に着目しつつ、筆者は、物語を語ることの意義を「物語における真実」の伝播にある、とするオブライエンの主張に立脚して作品解釈を行う。筆者は本作品が兵士達の想像や夢、幻といった、主観的にしか認識できないものを通してベトナム戦争体験の真実を提示しようとしている側面に焦点を当てる。例えば、先行する2作品で問題となったヒロイズムや勇敢は、兵士達が主観のみで語るエピソードにおいては単なる空想として示され、相対的な価値しか持ち得ないものとして再提示される。このアイロニカルともとれるポストモダン的な相対性においてこそ、筆者はオブライエンが「本当の戦争」を描くことに成功していると結論する。すなわち、兵士達の信用できない語りから成るエピソードの集積である本作品は、戦争体験のエッセンスの点描と言えるのであり、決して体系化できない真実を表すことのできる独特のスタイルを有していると論じてみせるのである。断片的テキストを紡ぐ手法に、ぼやけていく記憶の断片を重ねて見せることで、本章はオブライエンの戦争文学の本質たるものを、説得力を持って炙り出してみせる。また、この相対的真実こそ、戦争を知らない人々に対して、戦争の真実を伝える有効な方法でもあるとも、筆者は主張する。特異な戦争体験を共有可能な普遍的な体験へと芸術的に変容させる力について論じ、オブライエンの戦争小説が広く受け入れられている理由も説明できている。最後に筆者は、この読者の受容に係る言説空間において、従軍を巡る問題は、全く異なる次元の不朽の物語の裡に解消されていくと結論している。

本研究は以上のようにオブライエンのベトナム戦争3部作をまとめて議論することで、これまでにない作品解釈を実現しており、独創性と新見性に満ちたものとして評価できる。ただ、課題がないわけではない。最初に挙げたいのが、他のオブライエン作品の扱いである。オブライエンはベトナム戦争以外のテーマでも多くの作品を発表している。むろん、本研究が3部作についてのものであっても、他の作品との関連がもう少し示されるべきであっただろう。次に文人、哲学者、心理学者などの援用についてである。これらをどう論の中に組み入れていくかという点で、いささか恣意的であり、一貫性に欠けるきらいがある。どのような方針で援用するのかが明確にされたうえで、系統立てて援用されれば、より説得力が増したであろう。また第3章のまとまりについても一考の余地があると考えられる。しかしながら、これらの点はあくまで理想的な論文を想定したうえでの指摘であり、今回の研究が新たな領域に踏み込んだ点を鑑みると、その評価は変わらない。

結論として、学位審査委員会は、審査対象となる論文が、

- 1) これまでにない枠組みでオブライエンのベトナム戦争 3 部作について新たな読みを提示している点において、独自性、新見性のある研究であること
- 2) 先行研究や関連資料を学際的に当たり、それらを詳細に分析し、論理的に論じており、説得力のある学術研究として評価できること
- 3) 本論文の大部分は学会での口頭発表や論文の公刊によって学界においてすでに評価されたものであること、また、全体として体系的な研究として高い評価に値するものであること

の点から、「大学院文学研究科博士後期課程・ディプロマポリシー」に合致するものであり、「文学研究科英語英米文学専攻博士後期課程学位申請論文における審査および学位授与の決定にかかる基準について」の審査基準を満たしており、博士（文学）の学位授与が適当であると判断する。